

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

第一章「おもいたつところ」

かつて、熱心なご門徒であった男性が亡くなり、その息子さんが還骨法要の後に言われた言葉です。「出ましたわ。今まで出るはずもないと思っていた私の口から、通夜の時に念仏が出たんです。自分でもびっくりしました。お寺さん、これは先祖や死んだ親父の促しなんですかねえ」それは私にとっても忘れられない出来事です。

思わず出る念仏には、自分に先立って本願念仏に帰していかれた先人の歴史があります。はからずも私の口をついて「念仏もうさんとおもいたつところ」がおこる、それを不可・思議、つまり人知の介在は不可なのであります。私に初めから善き心素質があって起こすのではなく、起こっているところに、すでに弥陀の誓願不思議の用きがあるのです。私が念仏を称えて、それから積善を要するのでもなく、また臨終を待ってたすかるのでもありません。先祖や親が出遇って来た「念仏申せ」という本願の心に遇いえた即時に、撰取不捨の利益にあずかるのであります。

物の逃ぐるを追え取る

ここで注意すべきことは、もし弥陀の誓願が十悪五逆の罪惡に目覚めた者のみをたすけるものならば、「十方衆生」の言は、それこそ虚しいものと言わねばならなくなります。如来の呼びかけに頷き、罪惡を感じた者のみに対する条件付きの救いになってしまうからです。しかし仏法を誘る者、また修行をして佛になる可能性のない者やまったく無関心の者をたすけんと思し召したちけるのが仏の本願であります。宗祖は「撰取不捨」に、「撰め取る 一たび取りて永く捨てぬなり撰はものの逃ぐるを追え取るなり。撰は撰め取る。取は迎え取る」『弥陀経和讃』（親聖全第二卷原文片仮名）と左訓されています。逆に言うと、もし一部の人だけの救いであるならば、他の人々を絶望させることにもなります。人と生まれた本当の意義を知らず、また自分の思うようにならないと「仏も法もあるものか」と、つい愚痴が出るような生活をくり返している私たちをこそ憐んで、追いかけて捕まえて離さないという意なのでしょう。誹法・闡提とは、罪に無自覚な存在です。「自分には罪がない」、ということほど深重の罪惡はないのでしょうか。それ故にこそ、如来の大悲と言われる誓いの対象であるのです。まさに名は単に名に非ず、仏にはその名を通して、仏の心を受けとってほしいという願いがあるのです。

善悪を超えて

度々教えを聞く縁に恵まれている者は、つい「あの人は駄目だ。何回誘っても寺に来ない。真宗門徒とは言えない。」などと、聞法しながらも善悪において、他を裁くような心が動きます。実はそれこそ、「念仏にまさるべき善」を見出そうとしている小賢しさなのでしょう。宗祖の晩年には、「弾圧する者さえも憐み念仏申し合いなさい」という趣旨のお手紙があります。弾圧している者は、念仏の大事さを知らないのでしょうか。そういう人々にも伝わるように、念仏申し合おうと言われるのです。くり返しますが、宗祖はご自身に素質や能力があって、念仏に遇われたのではないのでしょうか。よき人法然上人に導かれて

いなければ、ご自身が空しく過ぎる人生のままであった、という謝念があるのです。わが身が「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」であると、深く了知されたそのままだ、弥陀の本願に遇いえたということであり、願より生じた信において、念仏申さんと思いつ心が、不思議にもこの身に起こってきたのでありましょう。